【研究主題】児童が楽しく積極的に地域文化を学び，郷土への愛情を育むキャリア教育の仕組みをつくる

【副題】なし

【学校・団体名】宮城県栗原市立志波姫小学校
【役職名・氏名】教諭　山内孝一

1　はじめに

中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」（平成 23 年 1月 31 日））で示された，「人間関係形成・社会形成能力」は，多様な他者の考えや立場を理解し，相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに，自分の置かれている状況を受け止め，役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し，今後の社会を積極的に形成することができる力である。

この能力は，社会とのかかわりの中で生活し仕事をしていく上で，基礎となる能力である。特に，価値の多様化が進む現代社会においては，性別，年齢，個性，価値観等の多様な人材が活躍しており，様々な他者を認めつつ協働していく力が必要である。また，変化の激しい今日においては，既存の社会に参画し，適応しつつ，必要であれば自ら新たな社会を創造・構築していくことが必要である。さらに，人や社会とのかかわりは，自分に必要な知識や技能，能力，態度を気付かせてくれるものでもあり，自らを育成する上でも影響を与えるものである。具体的な要素としては，例えば，他者の個性を理解する力，他者に働きかける力，コミュニケーション・スキル，チームワーク，リーダーシップ等が挙げられるとあった。これを基に，郷土に関する調べ学習に ICT を活用することで市役所や企業と連携し地域で活躍する人々と関わり，栗原市の魅力を児童に捉えさせた上で他者にその魅力を発信することで自分の考えを伝えていく。その活動から新たな社会を創造・構築する力を身に付けさせることを目的として，令和２年度と令和３年度の２年間，同一児童を対象に研究に取り組んだ。

2　研究目標

「Google　meet」の活用による他県の児童とのリモート交流を通して児童が楽しく積極的に地域文化を学び，郷土への愛情を育むキャリア教育の仕組みをつくる。

3　経緯

宮城県栗原市は栗駒山の雪解け水が田畑を潤し，東北でも有数の米どころである。また国内で初めてイワナの養殖に成功したことでも知られ，自然と共に生き，地域のつながりが非常に深い場所である。また，近年では栗原市役所定住対策課の広報活動が実を結び「東北の住みたい町ランキング」で１位となったことから，移住希望者からも注目を集めている。一方で栗原市は現在人口の４割が高齢者となり，県内では４番目に高齢者の割合が高い市である。高齢化が進んでいる栗原市にとっては，移住者を迎えることに加えて人口の流出を止めることも課題の１つである。そこで児童一人一人が栗原市の良さを見付ける活動を実施し，地域に根付いて活躍できるようにしたいと思ったのが今回の実践に至った経緯である。

市内のみならず全国の教育現場では，新型コロナウイルス感染症の流行により様々な活動が制限されてから３年以上の時がたとうとしている。この期間児童は，運動会や陸上大会といった体育的行事の活動内容の縮小，音楽祭や学習発表会の中止を余儀なくされた。現在少しずつ実施可能な方法を考えながら各種教育活動が実施されてきているが，まだ十分とは言えない。本校では，この状況下でも「学びを止めない」ことを目標に掲げ，まだ情報機器が揃っていない令和２年度から情報視聴覚担当者を中心に，できることを考えてＩＣＴ機器を使った実践を行ってきた。今回の研究では本校の情報推進化リーダーとして，またキャリア教育主任として私のこれまでの実践に触れながら，実践内容と結果について以下に述べていく。

4　研究の実践内容

仮説（1）

自分たちが暮らす地域について，児童自らが課題を設定して自主的に調べることで地域に対する興味や関心を高めることができるだろう。

手立て①

市内の工場を見学することを通して，多様な職種について学び，身近な就労場所があることを知ることで地域への興味や関心を高める。

〈実践内容〉

令和２年の９月にＪＡ新みやぎ

(図1：センター長に質問している様子)

農業協同組合の「カントリーエレベーター」をリモートで見学した。(図１)田んぼで刈り取った米をサイロへと運ぶ様子や貯蔵庫に保管されている大量の米を見て学ぶことができた。(図２)

(図２：米がサイロへと運ばれる様子)

１２月には本校の５年生を対象に，地域の工場の見学を実施した。見学したのは，志波姫地区にある「モリタ宮田工業株式会社」である。この工場は消火器を作っている工場で，消火器の国内シェア１位を獲得している。見学当日，コンベアの上を消火器が流れ，銀色の鉄の塊が一瞬で真っ赤な朱色に塗装されるのを見て，子どもたちから大きな歓声があがった。(図３）工場見学の終盤に感想発表をした時には「自分たちが住む場所のこんなに近くに日本一の工場があったなんて知らなかった。」という感想が聞かれ，身近な就労場所についての理解を深めることができた。

(図３：作業工程の説明を聞いている様子)

手立て②

「まち探検」を行い，自分が住んでいる地域を歩いてまわることで普段気にしなかった地域の先人たちの活躍や歴史的な建造物に目を向けさせて自身が暮らす地域に対しての興味・関心をもたせる。

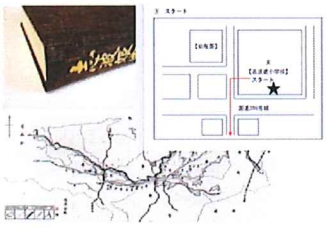
〈実践内容〉

本校では学年ＰＴＡ行事として，各学年で担任と保護者が話し合って行事を企画し，児童と保護者，教員とが一緒になって親子行事を楽しんでいる。

昨年度は新型コロナウイルス感染症の流行下でも実施できる内容を検討して子供たちだけで行えるような企画を考えて実施した。感染症予防のために３密を避けた上で実施できるものとして考えたのは，総合的な学習の時間「志波姫の歴史を探訪しよう」の一環として，志波姫小学校の周りをウォークラリー形式で探索することである。ウォークラリーで使用する地図やコマ図を地域に詳しい保護者と教員が協力して旧志波姫町史を基に作成した。(図４）また，各チェックポイントにはＱＲコード（図５）で読み込むと課題が示されるようにし，各チェックポイントで表示された志波姫に関する問題に答えることで地域について学べるようにした。コースはくりこま高原駅周辺の公園や公共施設を回る「カリヨンコース」(図６）と志波姫に古くから伝わっている神社をめぐる「神社コース」と大きく分けて２つのコースを用意し，子どもたちが自分でコースを選択して歩いて回れるように準備した。各チェックポイントを回りながら石碑の写真を撮ったり，看板に書かれた内容をメモしたりしながら周辺を散策した。(図７）後日学校に戻ってから，地域に伝わる「木花咲耶姫」や「伊豆野堰」について調べ直し，分かったことを学級で交流し合った。

仮説（１）に対する結論

市内の施設や工場の見学をしたことで，郷土の自慢の場所を知ることができた。日本でも有数の米どころとして知られる宮城県，その中でも栗駒山から流れる雪解け水がおいしい米をつくる栗原市は他県にも自慢できる。そして，工場見学で国内シェア第１位を誇る工場が市内にあることを知れたことは栗原市の魅力を感じることに繋がった。また，志波姫の歴史に目を向けることは，この地域で尽力した先人たちの活躍に目を向けることになる。「今，私たちがこの場所で安心して生活ができるのは，先人たちの努力があったから」と考えることで，今ここにいることが大切で特別なのだという思いを育むきっかけとなった。そしてそれが郷土を愛する気持ちへと繋がっていくと考える。


(図４：志波姫町史と使用したコマ図)

(図５：田んぼの脇に設置したＱＲコード)

(図６：くりこま高原駅を撮影する児童)

(図７：学校周辺をグループで散策する児童)

仮説（２）

自分たちが暮らす地域について，専門家の話を聞くことで地域の魅力を実感することができるだろう。

手立て①

栗原市役所定住戦略室の職員から栗原市についての話を聞くことで栗原市に対する興味関心を高める。

〈実践内容〉

総合的な学習の時間「地域の魅力を発信しよう」の単元において，今まで暮らした志

(図８：市役所の方とのリモート授業の様子)

波姫の良さを更に実感させる手立ての一つとして，栗原市役所定住戦略室の鈴木敬氏の話を聞いた。（図８）

内容は栗原市が「東北住みたい田舎ランキング」で１位になった経緯や市内の広報活動をする上で大切にしていること，栗原市の魅力について「Google meet」を活用してリモートで話を聞いた。話の中で特に児童の興味を引いたのは，栗原市には「移住者の相談に乗る移住コンシェルジュ」という人々の存在であった。農業，工業，畜産業，商業の専門家の人々から市内のことを詳しく教えてもらえるという取り組みである。上記のような活動が実を結び，移住者は年々増え，２７８組７１９名（２０２２年１月末現在）の移住者がいることを学んだ。

子どもたちは，鈴木氏の話を必死にメモしながら聞き，市内の広報活動についてたくさん質問して，自分が栗原市をＰＲする上で何を一番伝えたいかを考えながら話を聞くことができた。（図９）鈴木氏の話の中に，「栗原市は自然豊かな場所で，水も空気も食材も魅力的だが，一番の魅力はそこに住む人々の温かさだ。」という話が印象的であったようで感想にこのことを記入する児童が多数見られた。

（図９：説明を聞いてメモをとる様子）

仮説（２）に対する結論

鈴木氏から教えてもらったことを基に，児童一人一人が栗原市の魅力を捉え，発表用アプリ（ロイロノートスクール，keynote）を活用して栗駒山や伊豆沼といった地形について，栗原市の特産品，著名人やキャラクター，移住者や移住コンシェルジュ等についてスライドにまとめることができ，後述する埼玉県の児童とのリモート交流会に役立てることができた。

以上の仮説に対する実践を経て，キャリア教育について最終的なまとめに取り組んだ。

仮説（３）

これまでに調べてきたことを他者に分かりやすく説明することを目的に発表をすることで，自分たちが住む地域について親しみがもてるようになるだろう。

手立て①

埼玉県久喜市立栗橋南小学校とのリモート交流会を実施し，地域の魅力について発信することで栗原市の魅力を再認識させる。

〈実践内容〉

本校では，令和３年４月に１人１台タブレットが支給された。そのタブレットを使用して本校の６年生児童と埼玉県久喜市立栗橋南小学校の６年生児童とで３回に渡ってリモート交流会を実施した。

	日時	内容
１回目	５月２７日（木）	○各校顔合わせ，自由交流
２回目	１２月３日（金）	○修学旅行活動報告
３回目	３月２日（水）	○地域の魅力を発表

３回目の発表では，これまでの学習のまとめとして市内の魅力を他県の児童に伝えることを目的にこれまで学んできた地域の良さを発表する活動を実施した。（図１０）

（図１０：児童が作成した発表スライドの一部）

これまでに学習した栗原市内の農業や工業生産，志波姫地区に伝わる歴史や伝統，そして栗原市役所定住戦略室鈴木敬氏の話を基に発表資料を作成し，栗原市内の魅力を発信する活動を実施した。各校の発表の合間に質問の時間を設定し，オンラインでも互いの感想や意見を伝え合うことができるように配慮した。栗橋南小学校の子どもの感想の中には，「栗駒山の紅葉がとてもきれいだったので，コロナが落ち着いたら行ってみたい。」と興味をもった様子が感想から伝わってきた。オンライン学習でも十分に子どもたちが学んでいる様子が見て取れた。（図１１）

（図１１：リモートによる交流の様子）

発表後には，Google フォームを使って児童の感想を即時に共有をはかったことで，「相手に自分の発表はうまく伝わっていたのか。」や「相手に分かりやすく伝えることができただろうか。」といった不安要素を解決することができた。

（図１２：栗橋南小の児童に宛てた手紙）

（図１３：栗橋南小から届いたエコバック）

仮説（３）に対する結論

リモートでの交流を終えて卒業前に手紙を送り合ったり（図１２），栗橋南小学校から記念品が送られて来たりとお互いの学校の交流を深めることができたことが成果と感じている。（図１３）児童一人一人が感じた地域の良さを他県の児童に紹介したことで，自分たちが暮らす地域のよさを再認識することができた。

児童の感想は以下の通りである。（一部抜粋）

〈宮城県栗原市立志波姫小学校６学年児童の感想〉

○すごく楽しかったです。自由交流の時にお互いにたくさんの質問が出て仲が深まったと思います。お互い盛り上がったので２時間くらいやりたいと思いました。

○宮城県栗原市からとても離れている埼玉県の南栗橋ですが，リモートで３回も交流ができたことはとても良い経験になりました。また埼玉県久喜市の魅力も伝わってきて良いところだと感じました。機会があればまたやりたいです。

〈埼玉県久喜市立栗橋南小学校６学年児童の感想〉

○とても楽しかったです。５時間目だけで一日分くらい笑いました。今までほかの地域のことはあまり分からなかったけれど，今日の発表を聞いて栗原市のことを詳しく知ることができました。コロナウイルスが終息したら遊びに行ってみたいです。

○志波姫小の発表はとても良く，歴史などを特に強調していたのでこれを伝えたいという思いが伝わりました。そして発表が終わった後のおしゃべりもとても印象に残っています。３回しかこうして話していないのに昔から知っていたように笑い合って楽しく過ごすことができてとても良かったです。

5　成果と課題

今回，ICT 活用を進めながら栗原市の人々や企業，施設と関わることで魅力を捉えさせて感じ取ったことを他県へと発信することを課題に，実践的な活動に取り組んできた。令和２年度は児童全員で行う活動が中心であったが、令和３年度からは一人１台端末を活用して，より少人数で充実した活動を行うことができた。児童にとって市内の工場見学や「まち探検」により地域のことをもっと知ることができた。さらいに身近な場所で活躍する人々や「人・物・文化よりもそこに住む人々の温かさが自慢の栗原市」と感じられたことで，自分たちの住んでいる地域に誇りと自信，愛着をもつ大変よい機会となった。また，ICT 機器を使ったリモートでの発表を経験し，相手に伝わりやすく説明するためにはどうすればよいかを児童自身が考えたことで，タブレットを使ってスライドにまとめる際に気をつけることを児童一人一人が実践することができた。これまでの２年間，他県の児童と一緒に複数回の交流を通して，自分たちの住んでいる環境以外の同世代の児童との関わりが他者を理解する気持ちにつながったこと，そしてこれからの時代を生き抜く上で大切な他者理解の気持ちや協働していく力を少しずつ身に付けることができたことが成果である。また今回の実践を地方紙（大崎タイムス）に掲載してもらい，市内外に住む人々に向けて本校の取り組みを伝えられたことも成果の１つである。(図１４)

一方で，これから中学校に進学する児童が小学校で学んできたことや身に付けてきた情報技術に対してのスキルを生かしながら中学校での学習を進めていくために中学校と連携を図っていくことが今後の課題であると感じる。

(図１４：大崎タイムス掲載記事)

6　今回の研究を通して

ＡＩ技術やｓｏｃｉｅｔｙ５．０など，子どもたちを取り巻く環境は日々大きく変化している。１０年後の社会がどうなっているのか想像することも難しい昨今だが，どんな状況であれ帰って来られる場所，ふるさとの存在があるというのはとても心強いことだと思う。「子どもは地域の宝」高齢化が進む栗原にとっては子どもたち一人一人をみんなで大切に育てなければならいという意識が強いと思う。私はこれからも地域全体で子どもたちを育てようとする意識を大切にしていきたい。今回，地域の魅力について学んだ子どもたちが，今後地域を離れることになっても，栗原市は「心のふるさと」であり続けると信じている。児童が今後進学し中学校，高校，大学と都会への憧れをもつのは自然の流れであると思う。私自身も都会への憧れが強く，高校進学と同時に関東の大学へ進学した経緯があるためよく分かる。ただ，私は時間を経ることで少しずつ地元に戻りたいという思いが強くなったように感じる。それは幼少期に毎日見ていた栗駒山を遠くに臨む田園風景や秋になると黄金色に輝く稲穂と真っ赤な夕焼け，変わらぬ風景や温かい人々が私の記憶に残っていたことが大きい。これからも地域の良さ・魅力を子どもたちと一緒に見つけることで郷土に対する愛情を育んでいきたい。

〈参考文献〉

『中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」』(平成 23 年 1 月 31 日)